

[ちくほう地域研究]

ふたりの『あきこ』
—柳原燐子と与謝野晶子—筑豊地域研究会会員
宮嶋 玲子

一 はじめに——歌碑前の出会い

「私がここにいるのは、白蓮先生ご夫妻と与謝野晶子ご夫妻のご縁によるものです。感無量です」横の椅子にかけた方から、私がこう耳打ちされたのは平成一九（二〇〇七）年一〇月二六日。旧伊藤伝右衛門邸にほど近い遠賀川河川敷に、飯塚市ではじめての「白蓮の歌碑」が誕生する除幕式のことでした。

式には白蓮の長女、宮崎蓼荻さんが、「ことたま」会員五名を誘って、参列なさいました。その中のお一人、大阪から見えた池田真理子さんが隣り合わせた方だったのです。「ことたま」は白蓮が創った短歌の会で、蓼荻さんが引き継いでいます。それにしても、燐子と晶子とは……。

ともに「あきこ」と読みます。白蓮は再婚で姓が柳原から伊藤、宮崎と変わっていますが、本名は「燐子」です。つまり、私の前に突然、女性史、文学史に大きな足跡を残し、異彩を放っている「ふたりの『あきこ』」が出現したのでした。どこか異質な感じのする組み合わせに戸惑ってしまいました。

以来、私は燐子と晶子の関係を追い求めてきました。そこには燐子の晶子に対する尊敬の念、歌人、文筆家としての付き合いばかりでなく、晶子の子どもの結婚まで世話をする濃い人間関係がありました。ここで一度、中間報告をさせていただきます。

二 天眠と鳳晶子

では、池田真理子さんや母の植田安也子の話か

ら始めます。『小林天眠と関西文壇の形成』（編者 真銅正宏・田口道昭・檀原みずず・増田周子 和泉書院 二〇〇三年三月一日発行）によると、

小林家に生を受けた長女の安也子は誕生するとすぐ、子のなかった母方の植田姓を受け継ぎます。

安也子の父親は小林政治といい、明治一〇（一八七七）年生まれ。号を「天眠（てんみん）」と名乗っていました。商業都市・大阪にあって、若い頃から毛布問屋を本業としながら、一方で文学に興味と熱意を持ち、小説を書いていた青年でした。明治三〇（一八九七）年四月発足の、「浪華青年文学会」の機関紙『よしあし草』の発起人の一人でした。

明治一一（一八七八）年、堺市甲斐町の菓子商・駿河屋に生まれた鳳志よう（後の晶子）は二二歳になっていました。勧められて『よしあし草』に詩歌を投稿します。そのころ、与謝野鉄幹（本名・寛）は『明星』を創刊して名を馳せていました。天眠は「浪華青年文学会」が発展した「関西青年文学会」で鉄幹の講演を聴くべく企画し、大阪へ迎えたのが鉄幹との初対面でした。

晶子に直接会ったのは鉄幹と晶子の結婚直後、明治三四（一九〇一）年秋、天眠が上京して渋谷の新詩社を訪ねたおりでした。

天眠が植田家の一人娘の雄子との結婚に際して悩んでいた時、与謝野夫妻は親身になって応援しました。以来、与謝野家、小林家との親交は金銭的にも精神的にも生涯にわたり続きます。

真理子さんは祖父・天眠を次のように見ていました。「生活は地味、質素、しかし義理人情を重んじ、誠実にヒューマンな生き方をした。世の中で

- 一 はじめに——歌碑前の出会い
 - 二 天眠と鳳晶子
 - 三 逃避と挫折のはざままで
 - 四 三つの家の人々
 - 五 売れっ子歌人
 - 六 晶子の子どもの世話
 - 七 海恋し汐のとほなり
 - 八 おわりに——縦糸と横糸
- 付録 柳原燐子（白蓮）・与謝野晶子 同時期年表

は天眠をパトロンと評する人が多いが、人間としての愛と篤き友情で、若き日に果たすことができなかつた文学への夢を実業人として、晶子夫妻をはじめ文人を援助することで果たしたのではないだろうか。」(前出『小林天眠と関西文壇の形成』「序にかえて」池田眞理子)

三 逃避と挫折のはざままで

晶子が関西で文芸活動を始めた明治二八(一八九五)年ごろ、柳原燐子は北小路家の養女となり、養父隋光(よりみつ)から和歌の手ほどきを受けていました。十五歳で資武(すけたけ)と結婚。その翌年生まれた功光(いさみつ)を残し明治三八(一九〇五)年に資武と破婚。北小路家から戻った後は柳原家の義母初子の隠居所に幽閉の身になっていました。姉信子が差し入れてくれる古典もの、当時の流行雑誌など夢中で読みふけたのです。

『ことたま』(一九四三年七月号)に「歌(ころ)という燐子のエッセイがあります。幽閉されていた当時、新しい詩歌への憧れの気持ちをいきいきとつづつていて、上田敏や島崎藤村ら最先端にあった歌人、詩人が多く取り上げられ、晶子の歌についても記しています。

ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして
経よます寺

これは与謝野晶子夫人の歌。その当時の若い人でしらぬものはなかつた。

やわ肌のあつき血汐にふれもせでさびしか

らずや道をとく君

などは、若かつた娘たちは聞いて知つてはいてもそんなに心をとらえるものではなかつた。この歌はむしろ、大人が感心し、或いは罵倒の種とする作品であつた。

ほととぎす嵯峨へは一里京へ二里水の清滝
夜のあけやすき

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしていま
せる君ゆり起こす

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひあふ人み
なうつくしき

こういつた歌は、若い人々の口から耳へ、耳から口へと伝わつていったものだ

このように熱く述べています。日露戦争の真最中、『明星』に発表された晶子の長詩「君死にたまふこと勿れ」をめぐる論争などは、どんなにか刺激的だつたことでしょう。

燐子は次々ともたらされる再婚話や資武との五年間を忘れるかのように、学問への夢を膨らませ、二四歳になつて念願かない東洋英和女学園に入学。同級生は八才も年下でしたが、ミッシェン系の私学で満ち足りた寄宿舎生活を送ります。

二七歳で筑豊の「炭鉱王」、伊藤伝右衛門の元へ嫁ぎます。夢は次々と頓挫していきます。が、読書と、歌を詠うことは自由でした。歌を中心に交友も拡がり、歌集『踏絵』の出版は白蓮の名を一気に中央歌壇へ印象付けました。

大正七(一九一八)年の一月ごろ、政府がシベリア出兵を固めたことを背景に米の買占めが起

りました。米価の高騰が人々の生活を圧迫します。

そんな中、官僚的な、軍国的な偏見に満ちた現状を何とか清新な社会にしなければと東大法科の学生たち―宮崎龍介、赤松克麿らが集まりました。まず、「普選研究会」の名称で吉野作造の指導の下に活動を始めます。赤松克麿は大正七(一九一八)年一〇月から東大の緑会弁論部長となり、吉野作造に引率され、宮崎龍介ら五名と各地の演説会に赴いていきます。第一次世界大戦の終了した一二月、「新人会」が発足。民主主義とか社会主義のような過激な言葉を避けて「新人会」と名付けたそうです。さらに、新人会の学生運動と平行して、東大の吉野作造、一ツ橋大の福田徳三を中心に教授グループ「黎明会」の啓蒙革新運動が始まります。黎明会の機関紙『解放』は大正七年六月創刊、出版社は大鏡閣。最初の編集主幹が赤松克麿でした。

東京大学で国文学の講師であり、特に万葉集の研究家として著名であつた佐佐木信綱は燐子の戯曲第一作「指鬢外道」を黎明会の機関紙『解放』に掲載するよう推薦しました。

大正九(一九二〇)年一月、東京から一人の青年が燐子を訪ねます。『解放』に発表された燐子の戯曲「指鬢外道」を本にするために序文があると、大鏡閣の支配人から頼まれたのです。赤松克麿は大阪に急用が生じ、文芸方面を担当していた友人に依頼しますが、彼も都合が悪くなり、結局、政治、経済担当の宮崎龍介が行くことになりました。龍介は熊本県荒尾市出身の宮崎滔天の息子。九州と聞くだけで懐かしく、新人会で噂に聞いていた歌人のもとへ出かけたのです。

こうして二人は予期し得なかった出会いを果たします。別府の別荘で龍介は情熱を込めて社会変革の夢を語りました。燦子は「ねたましきかな」と詠む「恋もつ人」になり、龍介も「ブルジョア夫人との交際はまかりならん」として新人会を除名になります。燦子は春秋二回の上京の機会に龍介と逢瀬を重ね、やがて龍介の子を宿します。姦通罪のあった当時、道ならぬ恋は命がけでした。

四 三つの家の人々

ここで注目したいのは与謝野家の長男・光の書いた『晶子と寛の思い出』（一九九一年九月、思文閣出版）です。「寛」は鉄幹の本名ですが、一般にはほとんど知られていない小林天眠一家と与謝野寛・晶子、そして「赤松」の三家の関係が赤裸々に紹介されているのです。

徳山の赤松照幢は与謝野寛の兄。赤松家へ養子に行く。照幢の四男が克麿。赤松家には男の子が五人。大学行かせるのも大変だろう。うちの父は兄弟愛の強い人。世話をして克麿を小林政治の長女、安也子さんの許婚にした。安也子さんは母方の植田家を継いでおり、克麿は養子に入ります。許婚だということで三年間学資を出してもらい、夏休みは小林の家に帰って過ごしていた。その間に東大で吉野作造のお弟子さんになって新人会を創る。克麿、宮崎龍介が吉野作造先生を囲んでね。そしたら吉野作造先生の娘さんが克麿に惚れちゃう。克麿さんは屁理屈をつけて、小林との縁をきってしまおう。「お前みたいなブルジョアとは結婚しない」と。三

年間も学資を出してもらったのにひどい話ですよ。小林の家もショックだし、与謝野寛・晶子にしても間に入って世話したわけだから困りましてね。

植田安也子が兄のように慕った赤松克麿―この青年は寛の兄の子（甥）であり、龍介の友人であり、そして燦子から伝右衛門あての絶縁状を書き換えた「赤松克麿」その人だったのです。

《金力を以って女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の袂別（わかれ）を告げます》という見出しが付けられた絶縁状は「私は今最善の理性と勇気との命ずるところに従ってこの道をとるに至ったのでございます。私の生涯は所詮暗い一生で終わるものと諦めたのであります。併し幸いにして一人の愛する人を与えられました。私はその愛によって今復活しようとしているのでございます」といった内容で、大正一〇（一九二一）年一〇月二三日、大阪朝日新聞に全文が公開されました。「白蓮事件」の幕開けです。経緯を燦子は次のように振り返っています。

新聞に発表された絶縁状は私が書いたものではありません。宮崎の友人（筆者注・赤松克麿）が私が書いたうらみつらみの手紙のようなものでは駄目だ、と自分で書いて私の名前で発表したのです。伊藤へ届いたことを確かめてから発表する、という約束でしたが絶縁状は伊藤へ届く前に新聞に出してしまいました。私の出奔を単なる個人問題とせず、社会問題の立場から特権階級に対する挑戦にことさら利用したのでは

なかったかと思われまます。『現代婦人傳（私の歩んだ道・柳原白蓮）』神崎清編 昭和一五年五月三日発行 中央公論社）

五 売れっ子歌人

燦子は「事件」から立ち直り、与謝野晶子と肩を並べるほどの文壇の花形として、マスコミにしばしば登場します。

昭和二（一九

二七）年一二月

一五日付の東京

朝日新聞社にて

撮ったとされる、

燦子と晶子の写真があります。

「年末助け合い

の頒布会の短冊



与謝野晶子と1927年12月15日東京朝日新聞本社にて、年末助け合いの頒布会の短冊を書く

を書く二人」と説明があります。当時の新聞に関連の記事があるかもしれないと、図書館で新聞紙面を調べましたが、見つかりませんでした。ただ、一二月一三日の朝日新聞（朝刊七面）には次のような、小さい囲み記事が左側に出ていました。

与謝野、柳原
両女史席書

本日 締切

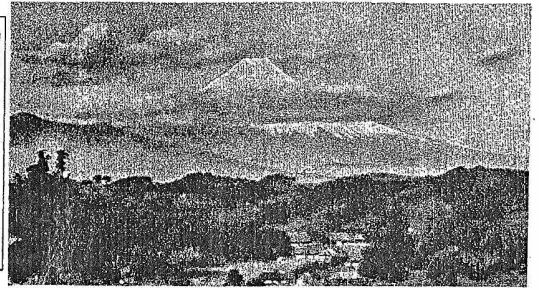
ご希望の方は本社
計画部あて往復ハ
ガキにて至急お申
込み下さい

新しい年を迎えて昭和三年一月一日（朝刊三面）に「勅題にちなみて 丹那より見たる富士」として三人の歌がありました。富士山の写真の下に囲んで掲載されていました。

山色新

佐佐木信綱

雲晴れて光かがよふ朝空にすがすがしよも天（あ



勅題にちなみて 母白蓮の生きた山

ま) つ神山

与謝野晶子

新しくいみじき御代の證(あかし)得ぬ富士に朝日のさし添える時

柳原白蓮

春の立つ空に富士あり永(えい)ごふに変わらぬものも新しきかな

長女、露蓼さんの

回想です。「昭和三

四年頃、父(龍介)が病気のため、生活は母(燐子)の肩にかかっていました。看病をしながら、締め切りに間に合わせるため、時には夜を徹して原稿を仕上げ、色紙や短冊もたくさん書いていました。母は、文筆で稼ぐことに喜びを感じていました」。

これは晶子の生き方、考え方とそっくりです。

六 晶子の子どもの世話

晶子の長男、光さんは「白蓮さんと母は歌の派が違うんですけど、母が白蓮さんの歌を褒めたっというんで、白蓮さんは得々としていました。母はあんまりお付き合いはなかったんですが、恭子(筆者注・晶子の孫娘)がまだ小さいときに、僕ら夫婦はよく出入りしてたんです。宮崎龍介さんといっしょに目白にいらつしやったあとですね。白蓮さんは母を大変尊敬してくれていました。」と

語っています。『晶子と寛の思い出』一九九一年九月、思文閣出版)

晶子は夫を昭和一〇(一九三五)年に亡くします。五七歳になっていました。

白蓮は晶子の子供たち(八峰、宇智子)の結婚

を世話しました。『与謝野寛・晶子書簡集』(一九八三年六月、植田安也子、逸見久美編 八木書店)から見てみましょう。

昭和一四年一月二六日 小林政治様

御礼 与謝野晶子

：八峰も柳原白蓮様御世話にてそのうち話の決まり候までに事成り居り候へば故人(筆者注・寛)鉄幹)のあといろいろとご心配ください候あなた様に申し上げおき候。私はまだ血圧の高きにや目など赤きが神経に障り候

長女の八峰(やつお)は大阪出身の俳人、文芸評論家の孝橋謙二(こうはしけんじ)と昭和一五年(一九四〇)三三才で結婚。七瀬(次女)と双子の姉妹です。一方、四女の宇智子の感想は、こうです。

私は主人と婚約中に、一度逗子の主人の家を、母と白蓮女史に連れられて訪れたことがあった。夏の初めで、母は黒い緞の夏羽織を着ていたが、白蓮女史は黒い羽織がお嫌いの由で羽織は着ておられなかった。老いてもまだ色白の上品な美しいお姿であった。車中でも、口下手な母より白蓮女史がいろいろ気さくに話しかけてくださって、気の重いわたしを笑わせてくださった。

このような二人がついて行っは、相手もさぞ気が重いだらうと思つたが、主人は私より十一才も年上だったので、私より母や白蓮さんたちの方が話があらうらしかつた。

『むらさきくさー母晶子と里子の私』与謝野宇智子著 新塔社 一九六七年一月)

晶子は昭和一五(一九四〇)年ごろから軽い脳溢血で半身が麻痺し、二男の秀(しげる)一家と同居します。寝たままの状態でも動く右手で孫たちに絵を描いてやり、歌も書きました。昭和一七(一九四二)年の初夏、子供たち、知人、弟子に見守られて逝きました。

七 海恋し汐のとほなり

昭和二〇(一九四五)年の八月、あと四日で終戦という日に、悲劇が燐子を襲います。最愛の息子、香織が戦死したのです。六十歳の母の髪は一夜にして真っ白になりました。「思えば今日までの私は、あの子故に生きていたと言ってもよいくらいでした。若い日の様々な苦悩も、名誉もあの子故に省みなかった私でした」と、苦しみをNHKのラジオで話すと、大きな反響がおき、「悲母の会」が誕生しました。

晶子のふるさと大阪府堺市の、筒井貞さんと燐子の出会いは「悲母の会」が機縁でした。貞さんは当時小中学校のPTAや婦人会活動をしており、地域の女性リーダーでした。彼女の残した「柳原白蓮さんの思い出」に拠ると、昭和二十年代後半のころ、燐子が初めて堺市の中百舌鳥にきました。難波の駅には大きな垂れ幕が掛かったり、新聞に

大きく取り上げられたそうです。地元のサークル誌『夕雲（せきうん）記』（一九五五年四月一日発行）に燦子が投稿した「与謝野晶子と堺」という一文が残っています。

私は先年大阪府下の堺市を訪れたことがありました。…その堺市の筒井夫人からの手紙に「堺市は与謝野晶子女史の生まれた土地だからこの地に女史の書かれたものが欲しいが何も無い、もしかすると貴女（筆者注・燦子）が持っていていられるかもしれないからお訪ねしてくれ」と市長さんから頼まれました、というものでした。…私の二十年來の友達、鎌倉の池田さんの家の座敷にかかっていた額に与謝野晶子、同寛石井柏亭、平野万里、この四人で沼津かどこかへ行って詠まれた歌と絵のあるのを思い出して早速池田夫人に話したら…つまり私の口利きで堺市に残りました。その頃読売新聞に続いていた佐藤春夫の『晶子曼陀羅』の挿絵は石井柏亭さんが描いていられたので、この額は一層堺市を喜ばせたことも嬉しかったのです。

筒井さんは当時の事情を「堺市はお金がなかったのか与謝野晶子さんを顕彰するほどの余裕がなかった。白蓮先生は一つでも歌碑をとおっしゃいました。思いついたらすぐ実行される方ですから短歌のお弟子さんの池田さんという方に話されて、晶子直筆の書き物を手に入れるべく尽力して下さった」と語っています。その後再び、堺市は晶子の歌を所望しました。筒井さんは再び白蓮に相談しました。

海恋し汐のとはなりかぞへつつ少女となりし父母の家

「この歌が是非欲しい、これは女史が故郷の堺を思っている歌だから堺で持っていたいものなんだ」ということでした。今度はこの歌に限る、というのだからあちこち探したり頼んだりしました。京都のあや子（筆者注・植田安也子）さんから『大阪の某という実業家、お金持ちだから金で買上げるといっても承知するかどうかわからない。堺の市長さんが自ら頼んだら、或いはただでも寄付してくれるかもしれない』ともお聞きしました（筒井さんのお話）。晶子の生家跡にこの歌碑があります。

「悲母の会」はやがて「国際悲母の会」、「世界連邦運動」へと発展していきます。昭和二九（一九五四）年、燦子は「沢山の人々を結び合わせて一つの運動として進めるということは、大変難しいことで私のごとき非才のものには到底出来えない大事業」（挨拶文から）として解散に踏み切り、その後は「世界連邦運動」の一員として、平和運動のために余生を捧げました。

八 おわりに―縦糸と横糸

福岡県飯塚市にある旧伊藤邸は平成一九（二〇〇七）年から一般公開されています。「白蓮事件」で世間の耳目を集めた燦子が十年間暮らしたお邸は伝右衛門が彼女のために丹精こめて一部は改築、大部分は新築したものです。教奇な運命の元に興入れしてきた燦子―お金持ちだが夫・伝右衛門との心満たされない日々、妻としての居場所を認め

られずに死を考えたこともありました。幸いにして一人の愛する人を与えられ、その愛によって復活します。世間からの誹謗中傷に傷つきながらも自分が選び取った人生に賭けました。

堺市の和菓子屋の三女に生まれた鳳（ほう）志よう―後の与謝野晶子は歌人、詩人、作家だけでなく社会評論、女性論の分野でも活躍し、鉄幹との間に十二人の子どもに恵まれ一人は失うものの十一人を育て上げます。

二人の女性は人間の生きる苦しみや喜びを歌などに託し、懸命に働き、家族を支えました。晶子亡き後、二五年も命を燃やし続けた燦子は生涯、晶子に寄り添ったといっても過言ではないでしょう。

そして、細部はともかく、おおまかな輪郭としては、燦子―龍介―赤松克麿―小林天眠という縦糸と、天眠―植田安也子―赤松克麿―与謝野晶子という横糸の織り成す人間模様が浮かび上がってきました。

声高に主義主張を振り回さなくとも全身、全霊を以って生き切った「二人のあきこ」は（尊厳を持って自分を生きることの大切さ）を私たちに教えています。まだ未解明部分の目立つリポートとなりましたが、燦子の「辞世の歌・十首」から二首を紹介して、いったん報告を閉じさせていただきます。

昨日と云ひ今日とくらしてうつそ身の明日のいのちをわが生むとす

そこひなき闇にかがやく星のごとわれの命をわがうちに見つ

柳原白蓮（燐子） 与謝野晶子 同時期年表

西暦 年号	柳原白蓮（燐子）	年齢	与謝野晶子	年齢
1878年 明治11年			12月7日、鳳志ようのち晶子 堺市甲斐町の菓子商・駿河屋に生まれる 鳳宗七 つねの3女	0歳
1884年 明治17年			4月 堺市宿院小学校入学	6歳
1885年 明治18年	10月15日 東京麻布 燐子生まれる 生後まもなく柳原家の次女として入籍 品川で種物問屋を営む増山くこの家に里子として預けられる	0歳		7歳
1886年 明治19年			漢学塾に通い論語などの素読を受ける	8歳
1888年 明治21年	10月7日 生母の奥津良（おくつ・りょう）死去 良の父は新見豊前の守・正興（まさおき）	3歳	宿院高等小学校に入学 更に新設の堺女学校へ転校	10歳
1891年 明治24年		6歳	3月 堺女学校〔現大阪府立泉陽高校〕卒業	13歳
1892年 明治25年	柳原家に戻り 麻布南山小学校に入学	7歳	店の帳場へ出て店番をしながら古典を読む	14歳
1894年 明治27年	北小路家の養女となる 8月に日清戦争勃発 実父前光死去	9歳		16歳
1895年 明治28年	養父随光（よりみつ）から和歌の手ほどきを受ける	10歳	9月『文芸倶楽部』に短歌一首入選	17歳
1898年 明治31年	華族女学校に入学 麴町区永田町まで徒歩で通学する	13歳	4月「読売新聞」で初めて与謝野鉄幹の短歌を知り感銘を受ける	20歳
1899年 明治32年		14歳	「よしあし草」11号（明治32年2月発行）に新体詩「春月」を鳳小舟の名で発表	21歳
1900年 明治33年	北小路資武と結婚 華族学校2年で中退	15歳	4月『明星』の創刊と共に新詩社に入る 8月鉄幹に初めて会い 山川登美子と共に浜寺公園・住吉神社を散策	22歳
1901年 明治34年	4月 功光を出産 10月京都へ移る	16歳	6月 堺の家を出て上京 第一歌集『みだれ髪』を鳳晶子の名で刊行 10月鉄幹と結婚	23歳
1902年 明治35年		17歳	11月 長男光（ひかる）誕生	24歳
1904年 明治37年	2月10日 日露戦争開戦	19歳	9月 詩「君死にたまふこと勿れ」を『明星』に発表 1月 次男秀（しげる）誕生	26歳
1905年 明治38年	破婚 義母初子の隠居所に幽閉の身となる 品川の里親 増山くこの元へ家出	20歳	第4歌集『恋衣』刊行（山川登美子・増田雅子と合著） 夫は鉄幹の号をやめ、本名寛に戻る	27歳
1907年 明治40年		22歳	3月長女（八峰）・次女（七瀬）誕生（名付親は森鷗外）	29歳
1908年 明治41年	東洋英和女学校に入学（明治43年卒） 在学中佐佐木信綱の竹柏園歌会に入門	23歳	1月 北原白秋、吉井勇、木下杢太郎らの新詩社脱退騒ぎ 11月『明星』廃刊	30歳
1911年 明治44年	2月22日 東京にて伊藤伝右衛門と再婚 3月 福岡に移る 『心の花』に作品を発表し始める	26歳	2月4女宇智子誕生 6月平塚雷鳥が『青鞥』への協力を求め来訪 詩「山の動く日来る」『青鞥』創刊号に発表。10月与謝野寛渡欧が実現	33歳
1912年 大正元年	筆名白蓮の誕生 明治天皇崩御 大正と改元	27歳	晶子も渡欧 フランス、イギリス、ベルギー、ドイツ、オーストリア、オランダを歴訪 美意識や価値観の日本との違いを発見	34歳
1914年 大正2年	九大医学部教授 久保猪之吉博士夫妻や医学部の学生たちが創刊した『エニグマ（謎の意）』に短歌を発表	29歳	4月4男アウギュスト（昱）誕生 新聞雑誌に多くの社会評論を書き女性の地位の向上に努めた	36歳
1915年 大正4年	3月 白蓮第一歌集『踏絵』刊行 野口さとの妹おゆうを京都より呼び寄せ 小間使いとする	30歳	12月 歌論書『歌の作りやう』刊行 5女エレンヌ誕生	37歳
1916年 大正5年	（婦人公論）創刊	31歳	3月5男健誕生 デモクラシーの主張が盛んになる	38歳
1917年 大正6年	筑豊疑獄事件起こり（～大正7年春）燐子も法廷に立つ ロシア革命起こる	32歳	寛・晶子は第一次世界大戦による先進的な都市機能の構築で発展を見せていた若松を来訪 6月21日 田川郡の伊田炭鉱見学 日田の鶴飼 耶馬溪訪問	39歳
1918年 大正7年	4月 大阪朝日新聞「筑紫の女王・燐子」を連載。全国的に知られる 12月東大新人会発足 宮崎龍介 赤松克麿ら参加	33歳	平塚雷鳥と母性保護論争 米騒動が起こる	40歳
1919年 大正8年	3月詩集『几帳のかげ』 歌集『幻の華』刊行 戯曲「指鬢外道」黎明会機関紙『解放』に発表	34歳	与謝野寛 慶応義塾大学文学部教授に就任 3月6女藤子誕生（普通選挙要求運動が起こる）	41歳

西暦 年号	柳原白蓮 (燐子)	年齢	与謝野晶子	年齢
1920年 大正9年	1月宮崎龍介、編集者として別府に赴き、燐子と出会う、以後文通始まる 3月「指鬘外道」大鑑閣より刊行 6月「指鬘外道」市村座で上演	35歳		42歳
1921年 大正10年	龍介、燐子とのことで黎明会機関紙『解放』の編集から離れる 10月20日家出を決行(燐子36歳 龍介29歳) 22日付け大阪朝日新聞 燐子家出を掲載 11月26日 伊藤家の天神「銅御殿」落成	36歳	4月 西村伊作 石井柏亭 河崎なつ 与謝野寛と共に文化学院を設立、中学部の学監となる 以後20年にわたる文化学院の生活はほとんど奉仕的労働であった	43歳
1922年 大正11年	3月 異母兄柳原義光 貴族院議員を引責辞職 柳原家で監禁の身となる 5月14日 龍介との子・香織誕生	37歳		44歳
1923年 大正12年	9月1日 関東大震災 宮崎家の人となり柳原燐子 柳原白蓮の筆名で文筆活動開始 11月 宮内省、燐子の華族除籍発表	38歳	大震災により『源氏物語』の完訳間近かの原稿を焼失	45歳
1925年 大正14年	8月 歌集『紫の梅』刊 9月6日 長女蕨琴誕生	40歳	5月第19歌集『流星の道』 11月童話集『藤太郎の旅』刊行	47歳
1928年 昭和3年	5月 歌集『流転』刊 9月 自伝小説『荊棘の実』発表	43歳	5～6月にかけて寛と共に南満州鉄道本社の招きで満蒙(現中華人民共和国東北部)へ旅行	50歳
1930年 昭和5年	小説『青春譜』(昭和4年「週刊朝日」に連載) 発刊	45歳	2月参考書『女子作文新講』(6巻) 刊行	52歳
1931年 昭和6年	3月『現代短歌全集第十八巻』改造社に「柳原白蓮集」収録 4月 1ヵ月半龍介・燐子 中国訪問	46歳	5月第23歌集『満蒙遊記』(寛と共著) 刊行	53歳
1935年 昭和10年	歌誌『ことたま』発刊	50歳	3月、寛 急性肺炎のため62歳で死去 11月再び「源氏物語」現代語訳に取り掛かる	57歳
1937年 昭和12年	盧溝橋事件	52歳	10月『短歌文学全集一与謝野晶子篇』刊行	59歳
1940年 昭和15年			5月 脳溢血のため湯敷で倒れ、半身不随となる	62歳
1942年 昭和17年	滔天の妻・槌子死去	57歳	1月、病状悪化し、狭心症を伴う。 5月29日 晶子死去 法名「白桜院鳳翔晶耀大姉」 9月、遺稿歌集『白桜集』刊行	64歳
1945年 昭和20年	8月11日 鹿児島県串木野にて香織戦死	60歳		
1946年 昭和21年	5月 NHKに出演 悲母の会結成 長女蕨琴 智雄(後に早稲田大学応用科学名誉教授となる)と結婚	61歳		
1947年 昭和22年	伊藤伝右衛門死去 87歳	62歳		
1950年 昭和25年	国際悲母の会九州支部発足	65歳		
1953年 昭和28年	世界連邦平和運動の婦人部部長として各地を講演旅行 10月20日出奔以来はじめて福岡を訪問	68歳		
1954年 昭和29年	別府銅御殿ホテル内に建った歌碑の除幕式に33年ぶりに龍介と参加 「国際悲母の会」解散	69歳		
1956年 昭和31年	中国より招待され、龍介と中国各地を1ヵ月半にわたって巡遊 歌集・『地平線』刊	71歳		
1958年 昭和33年	九州 神戸 三重など講演旅行 各地で歌を詠む	73歳		
1959年 昭和34年	群馬 岡山 大阪などに講演旅行 自伝『火の国の恋』(松永伍一編集) 刊	74歳		
1961年 昭和36年	緑内障のために徐々に視力を失う	76歳		
1965年 昭和40年	脳貧血で倒れ寝たきりとなる 自宅療養	80歳		
1966年 昭和41年	『短歌研究』に「いのち」10首を発表 遺作となる	81歳		
1967年 昭和42年	2月22日22時 燐子死去 神奈川県相模原市石老山顕教寺 香織と共に眠る 法名「妙光院心華白蓮大姉」	82歳		
1971年 昭和46年	1月23日 龍介死去 (78歳) 顕教寺へ眠る			